

佐賀大学教育学部附属中学校 3年

山口 悠希

兄は高校を卒業してアトリエに就職した。週五日、朝十時から昼の三時まで。少し短いけれど、長く活動できるものじゃないらしい。画材は筆ペンでとても不思議な絵を描く。私の似顔絵を描いてもらったけれど、鏡と違って全然可愛くない。でも、凄く上手な絵だった。

兄が給料をもらってきた。初任給だ。「高卒 初任給」で検索すると、十五万円くらいと書かれていた。中学生の私にとっては大金だ。でも、兄が自慢げに持ってきた「工賃支払明細書」を見てみると、一万三千百円と書かれていた。四週間で丁度百時間。兄の時給は、百三十一円だった。

兄は重度の知的障害者だ。上手に話すことはできないし一人でできることにも限りがある。兄は家から歩いて十分くらいの就労継続支援B型事業所で働いている。働いているというか、何人もの大人の手を借りて絵を描いている。それだけで一日に何万円もかかりそうなのに、兄は給料をもらってきた。私は不思議で母を尋ねてみると、兄の周りの大人達のたくさんの給料とほんの少しの兄の給料を支えているのは税金だと教えてもらった。

私にとって税金は払うものだった。お店に行くと消費税を取られるし、旅行で温泉に行くと入湯税を取られた。両親は所得税や自動車税について話していた。でも、兄を見て考え方が変わった。税金は水道や道路、年金など様々な公的サービスを運営するのに使われ、私達は健康で豊かな生活を送ることができている。医療も学校も兄も、どんな大金持ちでもその全てを支えることはできないけれど、一人一人が税金を納めることで一人ではできない大きな支え合いが生まれていた。納税は人助けなんだ。

私の将来の夢は医師だ。医師になって目の前の患者さんを救いたい。ただ、それだけじゃなく、その後ろにいる大勢の人達を納税で支えられる大人にもなりたい。

A五用紙に印刷された工賃支払明細書はとても小さくて書かれている金額は大きなものではないのに、国民全員の兄を応援する気持ちがこもったとても大切な手紙に見えた気がした。

普通じゃ考えられないかもしれないけれど、兄は時給百三十一円の仕事に毎日行きたいと言っている。一人では働けない兄がアーティストになるという夢を叶えられたのは税金のおかげだった。好きな仕事でもらう一万三千百円は兄にとっては大金だ。